

ワンポイント・ブックレビュー

田村 秀『データの罠 世論はこうしてつくられる』(集英社新書、2006年)
門倉貴史『統計数字を疑う なぜ実感とズレるのか?』(光文社新書、2006年)

本年9月の自民党総裁選においてヤフー「みんなの政治」が実施した「ネット調査」によると第1位が麻生太郎、安部晋三は最下位であったという。実際の総裁選の結果は周知のことなので省くが、その結果が「安部内閣のネット戦略に影響したという向きもある」という(日本経済新聞、10月19日)。そもそもこの調査は、どのような目的で、誰を対象に実施され、その結果がどのような意図で公表され、マスコミにより報道されたのだろうか。現代の日本社会では、「調査(統計)」の活用が広がっている。「調査(統計)」の活用は、国民がその判断材料を、自らの知見のみに頼らず、客観的なデータに求めるという点からすると望ましいことといえる。それだけに、「調査(統計)」は、その客観性の確保が要件となる。しかしながら、「調査(統計)」の活用が進むほど、分析手法が精緻となる一方、調査をする機関の意図が作為、無作為に混入ばかりでなく、情報が氾濫する中で調査結果はより刺激的なメッセージとして発信され、それをベースとした政策判断や議論が行われるという事態が生じている。このような「調査(統計)」をめぐる「危うい」状況下において、『データの罠』、『統計数字を疑う』が相次いで刊行された。

両著書は、このような社会の状況下で、マスコミを通して公表される調査(統計)への理解(疑問)を深める為に、国民がデータの理解能力を具えることの重要性を訴えている。

『データの罠』では、「第一章 世論調査はゼロンの鏡か」において調査手法やインターネット調査の抱える問題などを、「第二章 調査をチョーサする」において「都市ランキング」、「経済効果」などの事例の分析手法の問題を、「第三章 偽装されたデータ?」において「平均信仰の罠」、「『日本人の英語力』はそんなに低いのか?」などを通して「通説」への異論を、「第四章 『官から民へ』を検証する」において「地方公務員の給与はそんなに高いのか?」「公務員はそんなに多いのか?」といった今日の論争的なテーマの検証を、そして「終章 データの罠を見抜くためには」において国民がデータの罠に掛からずにデータの良し悪しを見分けられる能力を身につける必要性を、それぞれ展開している。

一方、『統計数字を疑う』では、各種調査結果から導き出された統計分析と国民の生活実感とのズレの問題を、「第一章 『平均』に秘められた謎」、「第二章 『通説を疑う』」、「第三章 経済効果を疑う」、「第四章 もう統計にはだまされない - 統計のクセ、バイアスを理解」、「第五章 公式統計に現れない地下経済」として、統計特有の数式をできるだけ使わず分かりやすく検証している。

両著書は「調査」と「統計」という境界領域を取り扱うだけに「平均」、「データのバイアス」など重複するテーマもあるが、例えば、『データの罠』で触れられた各種イベントの「経済効果」予測への疑念が、『統計数字を疑う』により安易に定型的な分析手法に依拠する民間シンクタンクの具体例をまじえ説明されるなど相互補完的な性格も持っている。

両著書には、新たな知見や調査実施に当たって留意すべき事項の指摘など少なくないが、さらに、調査(統計)自体の“劣化”への懸念が触れられている。調査環境は、個人のプライバシー意識の高まりを「個人情報保護法」が後押ししますますます厳しくなる一方、シンクタンク(調査機関)は、官民を問わない人件費をはじめとしたコスト削減と調査成果の“広報化”(業績主義)の要請により調査精度への配慮が希薄化する傾向に向かっている。調査(統計)が、客観性の確保を要件とするだけに、調査業務に携わる立場からは日々自戒しなければならない。(H・I)